



第41号(2026年春号)

発行日 2026年5月8日



Center for Teaching and Learning  
Division of Teaching Profession

# 教職支援部門

# ニューズレター



## 巻頭言

## 新たな一歩を踏み出す

本ニューズレターの刊行は2016年4月でした。それから10年を閲して本年4月に組織変更を行い、名称も教育基盤構築センター教職支援部門となりました。教職課程を有する学部の教職科目を一手に引き受けながら、センター員は各学部での授業に尽力しています。名称は変更となりましたが、与えられた使命は変わりません。引き続き関係各位のご協力・ご理解をいただきたいと思ひます。

昨年秋より次期学習指導要領の作成に向けた中央教育審議会のWGが動き出しました。私も国語WGの一員として会議に参加しています。昨年9月には教育課程企画特別部会の「論点整理」が出されて議論の大筋が示されました。基本的な方向性として、①深い学びの実装、②多様性の包摂、③実現可能性の確保が掲げられ、児童生徒の学びを確かなものとするための授業マネジメントできる高度専門職としての教師育成、デジタル学習基盤などの整備、裁量性のある教育課程などがあります。

現在は各WGにおいて議論が展開し、教科を横断した議論も積極的に行われています。国語WGでは学習内容に関する課題として、①言葉で思考を整理したり深めたりすること、②目的や場面に応じたコミュニケーション、③目的に応じた文章理解、情報の評価・熟考、④我が国の言語文化を継承・発展させる態度の育成の4点が挙げられています。母語を用いて思考したり表現したりすることは言語能力の基本となります。また「中核的な概念の深い理解」「複雑な課題の解決」という概念を用いた構造化など、新たな観点の議論も行われています。どのような資質・能力を身に付けさせようとするのか。そうした到達点を見失うことなく議論は進めなくてはなりません。

次期学習指導要領の姿は如何なるものとして、私たちの前に示されるのか。それを承けて教育活動の具体はどのようになるのかを注視しなくてはなりません。古代中国の宰相である管仲は「教育は国家百年の計」を説いたと言われます。同主旨の考えは上杉鷹山、武田信玄、さらには松下幸之助などにも受け継がれています。そうした考えを大切にしたい。



教育基盤構築センター長

西 一夫

副学長 (教育、附属学校担当)



## 初級CST養成講座を振り返って (2)



令和7年12月6日(土)松本キャンパスにおいて、令和7年度初級CST認定審査会を開催しました。CST(Core Science Teacher)とは、理科教育の中核的役割を果たす教員で、信州大学と長野県教育委員会と共同で人材養成に取り組んでいます。前号に引き続き、初級CST認定審査に挑戦したみなさんの感想を紹介します!

### 【理学部 山本 茜 さん】



1年生の最初は、同じコースの友達と一緒に参加させていただきました。教職離脱者が年々増えていく中で、CSTでしか関わらない仲間との交流もあり、とても楽しかったです。専門分野以外の実験も数多く体験し、充実した時間を過ごすことができました。また、最後の認定審査会は、共に教職を学んできた仲間や本職の先生方に私の授業を見ていただく貴重な機会でした。審査されるということで、実習中とはまた違った緊張感がありましたが、4年間の学びを存分に発揮できたと感じています。仲間の授業を見ることで、新たな学びを得ることもできました。4年間、貴重な学びの場を提供していただき、ありがとうございました。

### 【繊維学部 久保内 美樹 さん】

CSTでは、他の教職課程の授業では学べない、より実践的・実験的な授業の構成を知ることができ、とても良い機会になりました。また理科の幅広い科目を扱うので自分が表面的にしか知らない単元の原理などを実験的に学ぶことができました。教育実習で自由なコマを与えられた時にCSTの経験を活かせたらよかったなと反省しています。復習がしやすいように毎授業ごとにプリントがあれば、CSTを基にして、より生徒主体の授業にできるのではないかと感じました。



### 【繊維学部 室地 裕稀 さん】

CSTでの経験は、私の理科教育に対する考えを深める大きなきっかけとなりました。私のCSTでの活動は、主に桜井先生による講座への参加でした。そこでは教科書に掲載されているような定型的な実験ではなく「勉強」として構えずに取り組めるよう工夫された理科実験が行われていました。

これらの実験を体験することで、将来教員として同様の実践を授業に取り入れるための資質を身に付けることができましたと感じています。学習指導要領における理科の目標は、「自然の事物・現象に関わり」という言葉から始まっています。このことから、理科教育のコアとなるのは、自然の事物・現象と主体的に関わることでであると私は考えています。

CST養成講座での経験を通して、自然の事物・現象と出会い、それらと関わるための具体的な実験例を体験できたことは、非常に有意義なものでした。

### 【繊維学部 浅野 宏輔 さん】

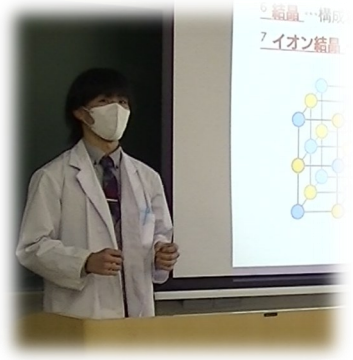
僕はCST認定審査会時、ほかの学生たちと違い、教育実習に行っていませんでした。しかし、ほかの学生たちは認定審査の研究教材を教育実習で実際に扱った授業をもとに取り組んでいました。そのため、ほかの学生が実際の教育現場で行い、フィードバックした授業を見られて、今後の自分の教育実習で使えるようなことが勉強でき、参考になりました。また、CSTの活動を通して、実験の大切さがわかりました。



## 【繊維学部 渡邊 華蔵 さん】

CSTでは、生徒に理科の面白さや身近さを実感してもらうために、教員はどのような働きかけをしていけばよいか、具体的に考えることができました。実験の準備と考えると大変ですが、CST講座を受講して、理科は身近なものがどんなものでも教材として活かせるという特性があると思えるようになりました。また、教員養成学部ではないからこそその視点や経験を十分に生かして、生徒と一緒に身の回りの「なぜ？」を探究していける授業づくりができればよいという教師像の目標ができました。

自身が進む道が教員としての道だとしても、それ以外の道だとしても、CST講座で得た考え方は活かすことができるだろうと思います。さまざまな経験を積ませていただき、ありがとうございました。



## 【繊維学部 本山 駿和 さん】

CSTの活動を通じて、理科の本質的な魅力を再確認した時間となったと思います。活動的には小中学生レベルではありますが、直感的になんでこうなるのだろうという子供の疑問に簡単な知識でも説明することができる。そのようなところで理科の面白さに気づける活動でした。そういうことなのか、こういうところに理科の知識が活用できるのだと思えるように、教材研究・授業展開への工夫が必要だと思いました。いつも楽しそうに授業してくださる桜井先生をみて、こちらでも楽しく活動できました。ありがとうございました。

## 【農学部 西 彩華 さん】



私は小学生の頃から理科が大好きでした。これは先生が理科の面白さを教えてくれたからこそだと考えます。そのため、子どもたちに理科の面白さ・楽しさを伝えられる人になって、理科を好きになってもらいたいと考えていました。そして、信州大学に入学し、教職を取る過程でCSTについて知りました。CSTでは自然界のものや身近な現象等を用いて、理科での学習内容を扱いました。身近な事象を扱うことで興味を持つことができると感じたと同時に、自分自身も面白い、楽しいと感じました。この感情を大切に、教材研究することや生徒への伝え方を考えることで私の目標を叶えることができるのではないかと感じました。CSTはとても貴重な経験となりました。

## 【農学部 山野邊 卓翔 さん】

教職の履修と同時にCSTも成り行きで履修しましたが、様々な実験が面白く楽しかったことがよく印象に残っています。また、これらの実験を通してさらに理科の知識や考え方を深めることができ、非常に充実した時間を過ごすことができたと思っています。CSTで学んだことを今後活かしていきたいと思いません。ありがとうございました。

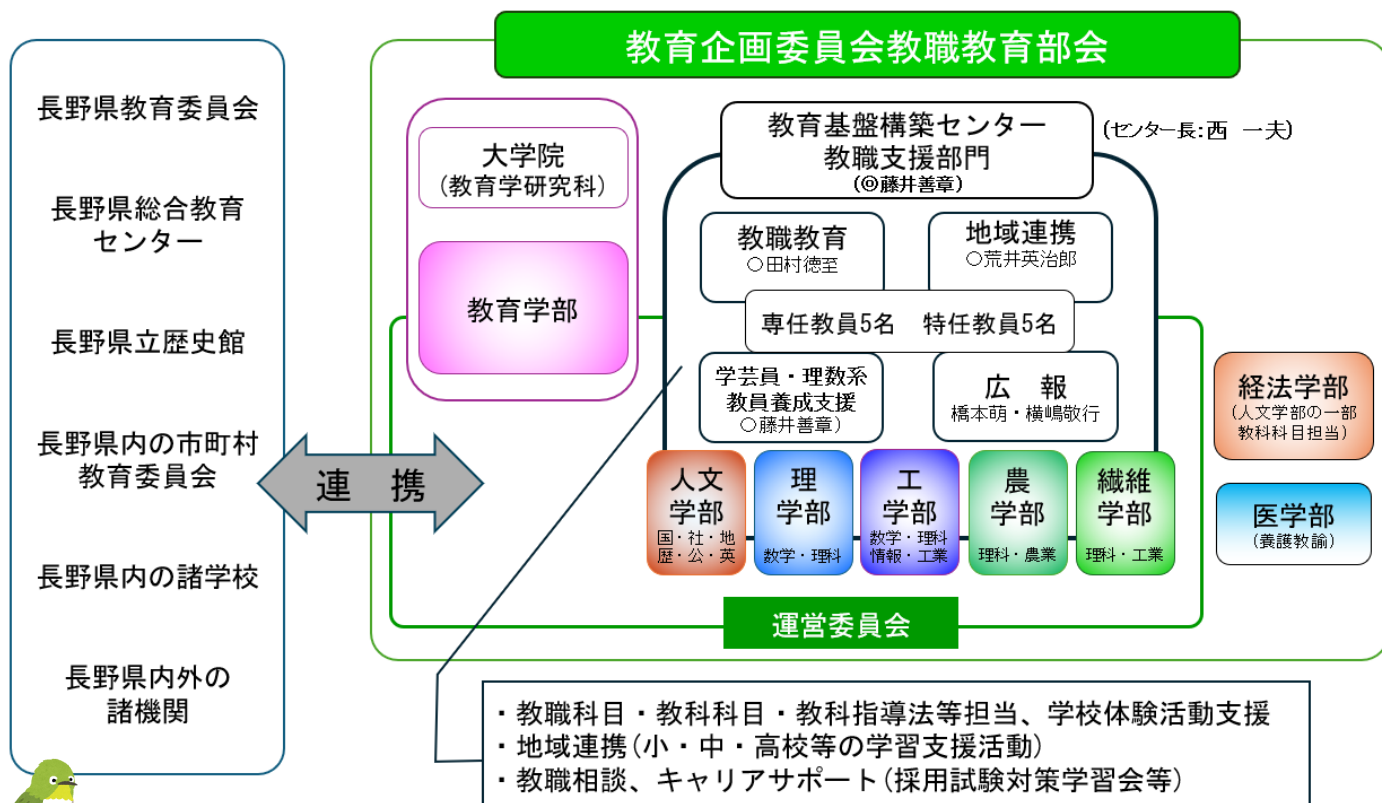


## 教職支援部門 3~4月の動き

- ・CST養成プログラム実施委員会 (3/3)
- ・長野県総合教育センターとの連絡協議会 (3/3)
- ・長野県立歴史館との連絡協議会 (3/5)
- ・小川村未来塾閉講式 (3/7)
- ・学芸員養成課程実施分科会 (3/19)
- ・新入生教職ガイダンス (4/6, 7)
- ・各学部高年次生向け教職ガイダンス…人文学部(4/8), 理学部(4/8), 工学部(4/6), 農学部(4/7), 繊維学部(4/3)
- ・松本市教委訪問 (4/28)



# 教育基盤構築センター教職支援部門 組織の全体像



## 教職支援部門の教員



センター長  
**西 一夫**  
(副学長 (教育、附属学校担当))(右下)

**藤井 善章**  
(教授：学芸員・理数系教員養成支援ユニット長)(左下)

**荒井 英治郎**  
(准教授：地域連携ユニット長)(右上)

**田村 徳至**  
(准教授：教職教育ユニット長)(右上二番目)

**横嶋 敬行**  
(助教：広報ユニット(HP)担当)(左上二番目)

**橋本 萌**  
(助教：広報ユニット担当)(左上)

## 編集後記

第41号(本号)より、タイトルが「教職支援部門 ニュースレター」となりました。西センター長の巻頭言にあるように、10年を経過し、より一層各学部との連携を強化し、学生のニーズに応え、地域に貢献できるよう、日々取り組んでまいります。今後とも変わらぬご支援、ご協力賜りますようお願い申し上げます。  
(広報担当 橋本 萌)

